地質ニュース561号，63－68頁，2001年5月
Chishitsu News no.561, p.63－68, May, 2001

【石の俗称】

力石（ちからいし）

加藤　碩一[1)]・遠藤　祐二[2)]

1. はじめに

有名な古川柳に『色男　金と力は　なかりけり』というのがありますが，世の中には金も力もあり，その上色男でもあるというあまりつきあいたくない男がいる反面それらが見事に欠落した哀れな輩（筆者らがどれであるかは意見が別れますが）も少なくありません．こうした三拍子に欠けた昔の若者達は，せめて力だけでもつけて若い娘の気をひこうと，重い石をこれ見よがしに持ち上げて涙ぐましい努力をしたことがあるのではないでしょうか．「力石」と称されるものが各地にあります．その持つ意味やいわれは様々ですが，その幾つかを以下に紹介します．実際に持ち上げてギックリ腰になっても責任は持ちませんよ．

2. 庶民の力自慢の対象となって使われた「力石」

「力石」は，本来は村の鎮守の祭礼などの際に，神の依代として信じられていた重い石を持ち上げて，穀物の豊凶などについて神意を諮るための石占いに用いられたのが起源です．その後，江戸～明治期の農業が盛んだった時代になると，村の若者たちが米俵をかつぐ訓練の一環ともなり，また町方で米問屋が若者を雇う際，石や俵を持たせその力量で給料を定める（いわゆる能力給です）のにも用いられました．それがさらに芸能化して一種の大衆娯楽と化し，単なる力比べのために使った石をも「力石」と称するようになり，それを持ち上げたり寄贈した人の名と石の重量を彫って土地の神社に奉納する習俗が生まれました．また，村相撲で「力石」という力士の名乗りが使われたこともありました．

東京都区内の例をいくつか紹介してみましょう．

写真1は北区赤羽西の香取神社の「力石」で，花崗岩質の岩石が主体です．東京都北区教育委員会の説明板には，「稲付村の力石」とあります．それによりますと7つある「力石」のうち5つに重さが刻まれてあり，19貫（約71kg）～55貫（約260kg）あるそうです．また，そのうちの6つには「小川留五郎」という当時に村相撲の大関を勤めた人の名前が彫られています．その1つには「さし石」とも刻まれており，神社境内で若者たちが石の「サシアゲ」をして力比べをしたそうです．本来は説明板の下に環状に並べられていたのですが，境内改修のため，取材時には（2000年6月）鳥居の脇に積まれていました．

写真2は豊島区雑司ケ谷の鬼子母神で，こちらは珪長質火山岩の一種のデイサイト質のものが多いようです．デイサイトはルーマニアのDacia地方の名に因んで命名されたものです．珪酸分SiO_2が約7割程度含まれています．デイサイトはかつて石英安山岩と呼ばれていましたが，石英を含まないものもあるので今ではその名は使いません．

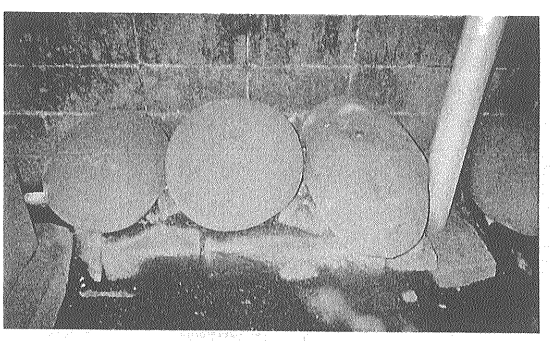


写真1　香取神社の力石．

1）産総研 地球科学情報研究部門
2）産総研 地質標本館

キーワード：力石

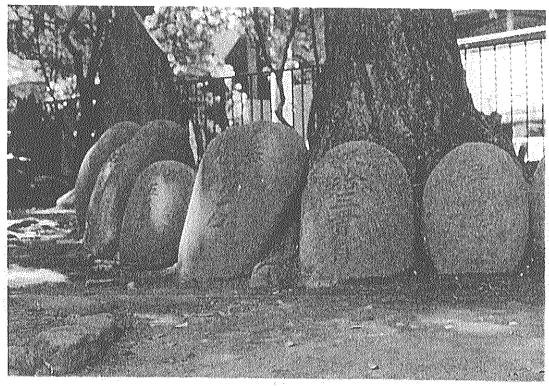


写真2　雑司ケ谷鬼子母神の力石.

写真3は江東区深川富岡八幡宮の「力石」で花崗岩と閃緑岩の中間の組成を持つ花崗閃緑岩などからなります．この石はわが国ではよく花崗岩と混用されます．

東京都江戸川区松島3丁目43番地（旧西小松川の道ケ島）にある通称「ダイロクテン」と称される赤い鳥居のある民間信仰の神さまは一説では比叡山の第6番目の神様といいますがさだかではありません．この所有者だったのが小久保清吉という鳶職で，近郷近在で有名な力持ちでした．道ケ島の香取神社境内にある「力石」の中に「清吉」と刻まれたものがいくつかあるのはこれです．

写真4は神田明神の「力石」で，高さ80cm，幅60cm，厚さ20cm程の安山岩です．石の上部には

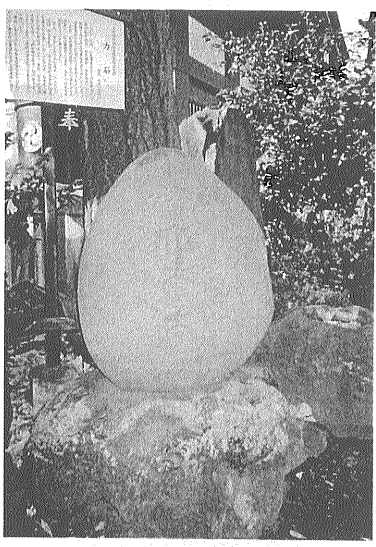


写真4
神田明神の力石.

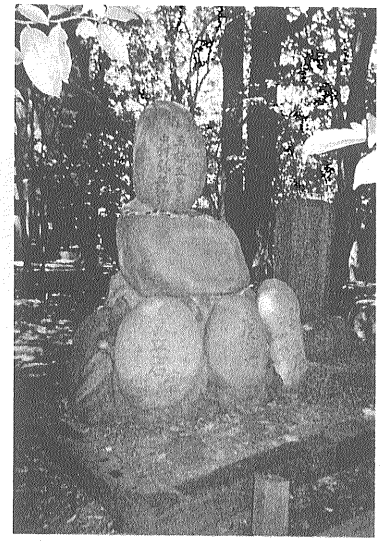


写真3
富岡八幡宮の力石.

「奉納」とあり，中央には「力誉石」，右側には「神田仲町二丁目柴田四郎右衛門　持之」，左側には「文政五年壬午三月吉日」と刻まれています．この他中野区北野神社にもあります．あちこち探してみてください．

もちろん地方でもよく知られています．例えば，長野県の諏訪地方では村々の辻や集会所の庭などに球状の大小の力石があり，青少年が力比べに用いました．長野県千曲川沿いの上山田町の神社にもあり，集落の地名にもこれに因んで「力石」というのがあるほどです．同様な地名は，東京都八王子市恩方町の力石集落で，ここの「力石」は堆積岩の一種の硬質砂岩で卵形をしていたといいます．これは重さ28貫といわれていましたが，重そうだと思って動かすと意外に軽く，反対にあなどってかかるとなかなか動かせないというひねくれた性格（?）を持っていたそうです．ある時この石を山上の八幡宮境内に移したところ，それに関わった人々が多く病にかかったという，なにやらツタンカーメン秘話的な言い伝えがあります．この石は「男石」で元あった場所の地下に「女石」があり，離れるのを嫌がったのではないかということで，掘ってみたらやはり大石が埋まっていたそうです．掘り出そうとするとさらに深く沈もうとするので恐れて埋め戻し，「力石」も元の場所に戻したというのです．石の何が男女の別なのか，石部金吉の筆者らにはまったくわかりません．

栃木県安蘇郡常盤村(現・葛生町)のお宮の境内にあった重さ20貫前後の「力石」は，かつぐと力が一層強くなるというポパイのほうれん草みたいな石ですが，形はジャガイモを大きくしたようだといわれていました．

山形県東田川郡朝日村大泉のお宮の境内には米七斗五升分のものから六斗石，五斗石などという「力石」がありました．ここでは，石の担ぎ方にも肩上げ，両ざし，片手ざしなどウェートリフティングに似た幾つかのタイプがあったとのことです．群馬県伊勢崎市の伊奈利神社には，「七拾五貫」と刻された「力石」が奉納されており，両側にこの力石を持ち上げた人々の名前が彫られています．さて，「力石」の中でも最も重いものの1つが，東京都墨田区千歳の江島杉山神社にある「力石」の93貫で，次いで千葉県浦安市の浦安庚申前の「力石」が90貫余と称されています．ほんとにこんな重い石を持ち上げられたのでしょうかね．さらに120貫(450kg)もの石を持ち上げたという信じがたい話もありますが．

さらに，こうした素人の力自慢に用いられただけではありません．何でも商売にしようとする輩がいるのは世の常です．江戸時代，隅田川水運の荷揚げ人足が，力を競うために持ち上げた「力石」の習俗は，後に「力持」(ちからもち)として興行化されました．その名残が「深川の力持」として江東区深川福住町に現在まで継承され「木場の角乗」と共に東京都の無形文化財に指定されているのです．「曲持」とか「曲差」としていくつかもの演目があります．代表的なのは「江戸の花五人持」「布袋の川越し」「俵の差し分け」「酒樽の差し分け」「用具のあしらい」「餅搗き」「俵で文字書き」「七福神宝の入船」「虚無僧」「力石の差し切り」などと味わいのある名称がつけられており，太鼓や笛のお囃子で演じられます．もっとも今では石のかわりに米俵を用いていますが(写真5)．

写真5
江東区民祭りで披露される「深川の力持ち」(写真提供は江東区広報課)．

3. 歴史的な由来のある「力石」

次は，歴史上の有名人物に関わる伝説というか信仰対象というか，およそ科学的根拠に乏しい(おまえの書いた論文みたいだなどと突っ込まないでください)謂われにまつわる「力石」のお話です．

京都府船井郡東本梅村(現・亀岡市)には「頼光の力石」があります．源頼光(948～1021)は摂津源氏の祖といわれる平安時代中期の武将で，渡辺綱・坂田金時・占部季武・碓井貞光のいわゆる四天王を引き連れて大江山の酒呑童子を退治した話で有名です．この「力石」には穴が開いており，酒天童子を退治に行く途次，源頼光が鉄棒で打ってできたものだというのです．また，源義経がここに家を建てた時，弁慶が庭石用に持ってきたが，あまりに重いのでここに置いていったものであるともいわれています．

「弁慶の力石」が四国巡礼88ケ寺の第三番札所である金泉寺(徳島県板野郡板野町)にあります．この寺は天平年間に聖武天皇の勅願により行基が創建した金光明寺が始まりです．のち空海が四国巡行中，水不足に悩む人々のために井戸を掘り，黄金のごとくこんこんと湧き出た(どんな湧出のしかたなのでしょうか)霊水に因んで金泉寺と改称したといいます．世に名高い源平合戦の幕開け，摂津一ノ谷(現・兵庫県神戸市須磨区)の合戦に敗れて讃岐屋島(現・香川県高松市)に逃れた平家軍を追って，源義経率いる源氏軍が現在の徳島県小松島市のあたりに渡海したと伝えられています．そこから屋島へ向けての行軍の途中，ここ金泉寺に休息した一行の戦意をなおも鼓舞するため，大力で知られた武蔵坊弁慶が差し上げたとされる岩塊です．横1m，奥行き30cm，高さ60cmほどの大石

で，岩質はこの地方に広く分布する上部白亜系の和泉砂岩と思われます．和泉砂岩は四国西部から紀伊半島まで中央構造線に沿ってほぼ東西に広く分布し，ほとんど海成のタービダイト（混濁流によって運搬・堆積した堆積物）からなる和泉層群の一員です．金泉寺本堂左手の礼所を結ぶ参道沿いの竹垣の中にひっそりと置かれています（写真6）．

これとは別に「弁慶の力石」とも言われるものが，岩手県上閉伊郡綾織村（現・遠野市）字山口にあり，「続石」（つづきいし）とも称されています．これは，二つの台石に巨大な笠石が乗っている組み石で，神社に詣でるのにこれを潜るので鳥居の代わりをしているとも言われています．片方の石には目の形の窪みがあり，弁慶が笠石を持ち上げる時に足をかけた跡だという言い伝えがあります．こうした石の窪みを指や手の跡になぞられることはよくあり，江戸時代中期の国学者である谷川士清の編集した一種の国語辞典ともいえる「倭訓栞」に「相州の産に景浦が力石と名づくるあり．亙方七寸，高さ三寸ばかりなり．色黒くして滑らかにして，五指を容るる跡あり．掌文もほぼ見ゆ」とあるのもこの類です．これらは「足跡石」などと呼ばれ，ほかにもたくさんあるので稿を改めて紹介しようと思います（加藤・遠藤，1999参照）．

宮城県栗原郡にある「力石」は，高さ一丈五尺，周囲一丈余りの大石で，昔，松浦佐夜姫が通りがかりに腰掛けて旅の疲れを休め，力を得たことから命名されたそうです．佐夜姫は肥前国松浦郡に伝わる伝説上の女性です．『万葉集』巻五に歌があり，任那に派遣された恋人の大伴狭手麿との別れを惜しみ峰に登って領巾（ひれ）を振りつづけたといいます．「肥前国風土記」によると，その後蛇を婿とし，沼底に沈んだといわれ，各地にのこる水神の生贄とされた女性説話の原型ともなっています．またこの「力石」には別の謂われもあるそうです．それは，安倍貞任征伐の時に，鎌倉権五郎が二つあった大石のうちの一つを持ち上げ遙かかなたの谷に投げ込み，味方の士気を高めた時の残りだともいうのです．鎌倉景政通称権五郎は，平安時代後期代々相模の国鎌倉を領有していた豪族で，16歳の時に源義家に属して後三年の役に出陣し，陸奥国の豪族安倍兄弟を征伐したといわれ，その豪勇ぶりは良く知られています．つまり，合戦時に右眼を射ぬかれながらも屈せず，敵を逆に射殺したというのです．さらに味方の三浦為次という侍がその矢を引き抜こうとして権五郎の顔を踏みつけようとしたことに怒り，刺し殺そうとしたほどの気性の荒さでした．陸奥からの帰途，霊泉に浴して目の矢傷をなおしたといわれる「片目清水」の伝説や彼を神として祀る風習（柳田国男の言う「目一つ五郎」伝説）として各地に知られています．有名な石は何度もお役に立つようです．

写真6　弁慶の力石．

さて，これらの「力石」とはちょっとニュアンスが違うのが，大阪府泉北郡八田荘村（現・堺市）の行基菩薩の出生地といわれる家原寺にあったという「力石」です．『家原文殊の力の石は殿がかたげりや軽かかる』という歌が伝えられているそうです．この歌は，私の殿御は善い人だから家原文殊の力石が軽く持ち上がるという意味で，吉凶判断から転化したものであるといいます．

福岡県福岡市博多区上川端町にある櫛田神社は，古来博多の守護神です．『太平記』巻11には元弘3年（1333）菊地武時が鎮西探題北条秀時の館を攻めた時，乗馬が社殿前でとまって動かず，怒った武時が社殿に鏑矢を射込むと馬が動き出したという言い伝えがあります．後で社殿内を見ると大蛇が矢に当たって死んでいたそうです．この神社の庭前に「力石」があるそうですがどういう謂われかはよく知りません．

また，沖縄県国頭郡（くにがみぐん）伊江村川平の自然洞窟の宮寺窟（ニャーティヤガマ）にある「力石」は，現地ではビジル（ビジュル）ともいい，子宝を授けると言い伝えられていました．例えば，大き

な石を持ちあげられる丈夫で力強い男性を探す方策だったのでしょうか．この洞窟は第二次大戦中は防空壕として使用され「仙人洞」（せんにんがま）とも呼ばれたものです．これも元は吉凶禍福を判ずる卜石だったようで，名護村屋部，東江ほか各所にあるということです．例えば，国頭郡今帰仁村の寺原にある寺窟（てらがま）という洞窟は，その昔源為朝が上陸してここに籠もったという信憑性の薄い謂われがありますが，ここにも「ビジュル」と称する霊石があって，明治・大正時代の頃には『愚民來りて吉凶禍福を判ず』と言われていました（長谷部，1919）．まあ，今時でも占い記事は女性雑誌必須の定番記事であり，冠婚葬祭に日の吉凶を気にする輩は多く，コンピュータ占いまであるのですからIT革命の世の中でも人間そうは変わらないのかもしれません．

さて話変わって，古今の書物に「力石」の話を渉猟してみましょう．

まずは宇治拾遺物語にある「力石」の一種ともいえる「水口石」の話です．その昔，高島の大井子という大力女が，村人に意地悪され，彼女の田に水が流れないようにされたそうです．その仕返しにある晩彼女は10人や15人でも動かせないほどの四方が6～7尺ある大石を一人で水口まで運んで堰を止め，逆に自分の田にしか水がこないようにしてしまいました．翌日村人が気付いて多勢で除けようとしても動きません．それ以上人を入れると田圃そのものが荒らされてしまうので手のうちようがなく，ついに詫びをいれたそうです．この大石が「水口石」と呼ばれしばらく現地にあったそうです．

さらに脱線すると，「日本霊異記」には2人の大力女が争う「力女競力」という恐ろしくて読む気も萎える話があります．女子プロレスに興味のある方は原本をどうぞ．

現在に時点を進めましょう．「力石」という落語仕立ての短編小説があります（泡坂，1999）．かい摘んで筋を追いますと，ころは江戸時代，力持ちで評判の奉公人のおますに隠居が，近くのお宮の手水鉢のそばにある「雷電石」という字を彫った丸い「力石」（その昔大関雷電為右衛門が頭上に差し上げたと言い伝えがある）を家の前まで運べたら褒美をやろうとけしかけました．とうてい女には運べないだろうと（今時こんな男尊女卑的な言辞を弄したら非難ゴウゴウですが）高をくくっていたところ，ある夜実際に運んできてしまいました．なにか工夫というかズルをしたのではないかと疑って問いただしました．すると以前隠居から『ものは水の中にいれると軽くなる』と聞いていたおますは勘違いして，力石を手水鉢の水の中にいれてそのまま手水鉢ごと担いできたというのです．「ウェー」というオチです．

さて，ここに出てきた雷電は天下無双といわれた大力士で明和四年（1676）に長野県に生まれました（第1図）．幼名太郎吉といい，小さいころから母親を風呂桶ごと抱え運んだとか，荷を積んだ馬を目よりも高く差し上げたとか，大力を示した逸話が数多く知られています．江戸相撲の地方巡業時に見込まれて出府し寛政七年に大関昇進，16年間にわたって在位し九割六分二厘という古今最高の勝率をあげたのです．また，学才にも富み豊かな人間味を持ち敬愛されたそうです．彼の生家は復元され，土間に土俵が作られているのを見ることができます（生家の住所は〒389-0512　長野県小県郡東部町大字磁野乙1981-2）．この生家の前に「力石」があります．数10cm大のやや不定形な石で（写真7），かたわらの説明板には『雷電の鋤石（すきいし）』とあり，『この石は，雷電の鋤石といって，雷電が田畑の行き帰りに，鋤の先につるして歩き，肩，腰，足を鍛えたといわれています．別に「力石」とも呼んでいます』と書かれています．雷電生家の北方山地を形成する烏帽子岳（2,055m），湯の丸山（2,105m），籠の登山（2,228m），三方が峯（2,040m），高峯山（2,105m）を主峰とする烏帽子火山群は，上田市と浅間山のほぼ中間に位置する

第1図
雷電の姿絵（東部町教育委員会リーフレット）．

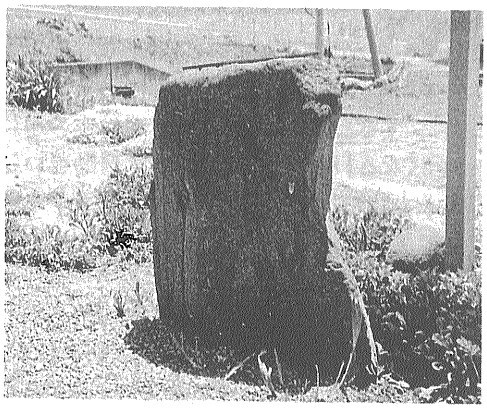


写真7　雷電の鋤石（力石）.

カルデラを持つ第四紀の成層火山です．輝石安山岩とデイサイトが交互に噴出して形成されたもので，雷電生家付近はそのうちの烏帽子岳溶岩が広く分布し，この「力石」も同質の紫蘇輝石普通輝石安山岩なので付近にあった岩塊を利用したものでしょう（第2図）．そんな石もあるそうなので，近くに行った節には立ち寄ってみてはいかがでしょうか．

（訂正：前回紹介した「菊の石」（本誌557号）の中で写真3（p.60）に掲載したアンモナイトを「三笠市立博物館標本」としたのは誤りで，正しくは「角田清治氏標本」です．お詫びして訂正いたします．）

参　考　文　献

泡坂妻夫（1999）：「力石」（初出：小説新潮1996年1月号），泡亭の一夜．新潮社．258p.

長谷部順治編（1919）：沖縄縣國頭郡誌．450p．國頭郡教育部會．

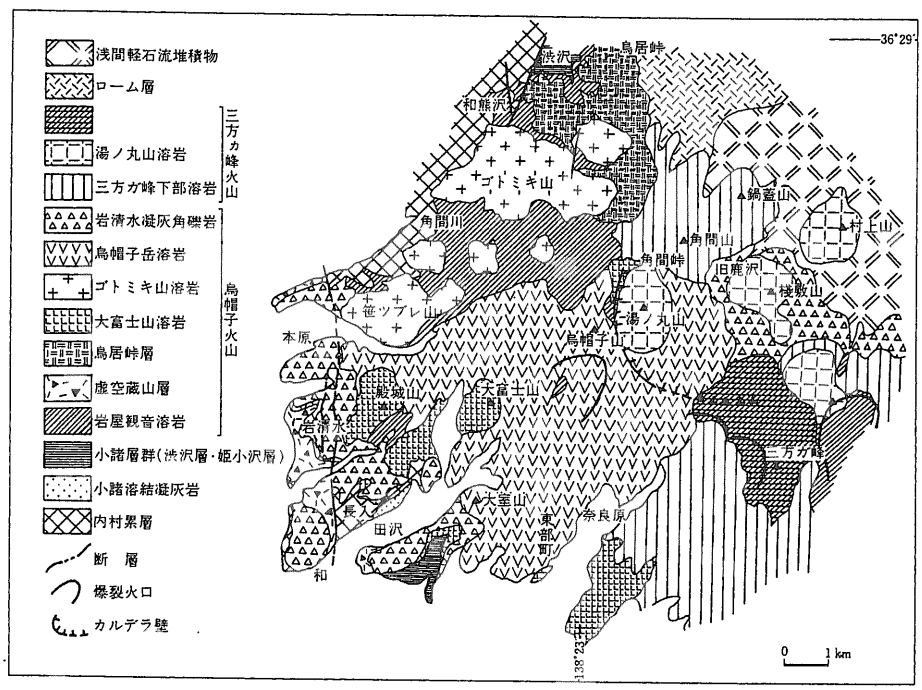
飯島南海夫（1962）：フォッサ・マグナ北東部の火山層序学的並びに岩石学的研究（その1）火山層学的研究．信州大学教育学部研究紀要．12，86-133.

加藤碩一・遠藤祐二（1999）：石の俗称辞典．愛智出版．312p.

日本の地質『中部地方Ⅰ』編集委員会（1988）：日本の地質4　中部地方Ⅰ．共立出版．332p.

KATO Hirokazu and ENDO Yuji (2001)："Chikara-ishi" stone.

＜受付：2000年9月25日＞



第2図　烏帽子火山地質略図（飯島，1962；日本の地質『中部地方I』編集委員会,1988）.